

期日:2013年2月23日(土)
場所:函館市勤労者総合福祉センター

連続講座B 箱館諸術調所 II期 函館のたから —— 老舗シリーズ

第3回 題名「函館におけるハリストス正教伝道 150年余の歴史」

講演者 函館ハリストス正教会
長司祭ニコライ・ドミートリエフ

創立年 安政5年(1858年)
創立者 初代ロシア領事ゴシュケヴィチ

講義概要(歴史)

PP[1]

【日本正教会の黎明】

PP[2] ロシア領事館と付属聖堂

1855(安政2)年、日露和親条約締結

1858(安政5)年、日本最初のロシア領事館が箱館に開かれ、初代領事ゴシュケヴィチ一行が来航。ゴシュケヴィチは日蓮宗実行寺に仮住まいをしながら、ロシア領事館建設のために相応しい土地を探す。

1859年、上大工町の土地(現在の函館ハリストス正教会境内地)を奉行所より借り受ける。

1860(万延元)年、ロシア領事館及び領事館付属聖堂竣工。

1863年には、領事館の敷地の東隣に新たに土地を借り受け、ロシア海軍病院を建てる(1866年、焼失)。

PP[3] 初代ロシア領事ゴシュケヴィチ

ロシア正教会司祭の家庭に生まれ、サンクトペテルブルク神学アカデミーを卒業する。聖ニコライの先輩に当たる。聖職者にはならず、外交官の道を歩むが、日本における正教伝道のため、多くの便宜を図り、聖ニコライの宣教を援けた。

PP[4]、PP[5]

1860(万延元)年、領事館及び領事館付属聖堂竣工。(初代聖堂)

この聖堂は、主の復活を記憶し「復活聖堂」と名付けられた。日本にかつて伝えられたが滅

ぼされてしまったキリスト教がふたたびこの国に現れたという意味を込めて、ゴシュケヴィチが命名した。この年の秋、修道司祭フィラレート(臨時管轄司祭)により成聖される。

聖ニコライが着任した時(1861年)には、既に教会が建っていた。聖ニコライは初代管轄司祭ワシリイ・マホフ神父の後任、二代目の管轄司祭として着任した。

PP[6] 亜使徒日本の大主教聖ニコライ(1836年～1912年)

1861(文久元)年7月、函館に着任した時は、修道司祭ニコライ(カサートキン)。25歳の青年であった。日本の言語、歴史、文化を研究し、聖書を始め多くの祈祷書を日本語に翻訳した。格調高い文語体の聖書は、「ニコライ訳」と呼ばれ、その正確さが高く評価されている。1891(明治24)年、東京神田に東京復活大聖堂(ニコライ堂)を建てる。大津事件、日露戦争などの日露間の政治的難局にも誠心誠意臨み、日露両政府の信頼を受ける。50年間の宣教活動の後、東京神田にて1912(明治45)年、永眠。この年、日本全国で正教会の教会206、神品教役者42人、伝教者115人、信徒総員34,111人、会堂175。東京復活大聖堂での聖ニコライの埋葬式には、宮内省より恩賜の花輪が届けられた。天皇陛下が外国の宣教師の永眠に際し花輪を賜るのは初めてのことであった。

1970(昭和45)年、ロシア正教会において「亜使徒」として聖人の列に加えられる。「亜使徒」とは、主ハリストス(=キリスト)の12使徒に準ずる宣教を行ったという意味。

【日本正教会の母であるロシア正教会について】

幕末日本にロシアからもたらされた正教会は、キリスト教の諸教派の中では「Orthodox Church」と呼ばれ、古くからの伝統を守っている教会。

ローマ帝国が東西に分割された後、元来一つであったキリスト教が、それぞれの地域で伝統・習慣において独自の発展を遂げたことにより、11世紀に至って東西の教会として分かれる。地理的にコンスタンチノーブルを中心とする東ローマ帝国で信仰されてきたキリスト教(正教会)は「東方教会」とも呼ばれ、ローマを中心とする西ローマ帝国で信仰されてきたキリスト教(カトリック教会)は「西方教会」とも呼ばれます。

16世紀以降、宗教改革運動に伴って西方教会から分かれた教派がプロテスタント教会です。

PP[7] ビザンチン ロシア 日本

ビザンチンからロシアへ、ロシアから日本へ伝播した正教伝播経路。

PP[8]、[9] ルーシの洗礼

988年、スラヴ民族はビザンチンより正教の教えを受ける。キエフにおける「ルーシの洗礼」。キエフ・ルーシの大公ヴラジーミルは、自国の宗教を選定するために、諸外国に使者を送り、各国の宗教事情を調べさせます。『原初年代記』には、正教を国教とする決め手となった報告

が次のように書かれています。

「我々はギリシャ人のもとに赴いた。彼らは我らを自分たちの神に仕える場所に導いたが、そのとき我らは天の上にいるのか、それとも地上にいるのか分からなかった。地上にはあのような眺めも、あれほどの美しさもない、それは口では言い尽くし難い。我々に分かっているのは、かしこでは神は人と共にあり、彼らの勤行はいかなる国のものよりも優れているということだけである。我らはあのみしさを忘れることができない」。

PP〔10〕、〔11〕 ロシアにおいて土着し、大きく花開いた正教。

PP〔12〕 世界の正教会

日本正教会は、ロシア正教会(完全独立教会)を母教会とする自治独立教会。

PP〔13〕 ロシア正教会と日本正教会

函館正教会はロシア正教会の総主教聖下の訪問を二度受けている。一度は2000年のアレクセイⅡ聖下、もう一度は2012年のキリル聖下。両聖下とも、日本を訪問する際には、日本の聖ニコライの足跡を辿って、訪問の第一歩を函館にしるしたい、と希望された。

【箱館の町に吹いたロシアの風】

〈ロシア病院、ロシア語、写真技術、洋裁、ロシア・ホテル、正教学校、正教女学校、印刷技術、正教の祭日、西洋音楽、測候、旧教派など〉

ロシア病院

前述のロシア病院。新島譲が、渡米する前に函館に滞在していた時に目の治療を受け、その体験を記している。

「…ロシア皇帝から経営維持費が全額支給されるので、乞食のような貧しい者にも病状に応じて高価な薬を与え、唯病気が全快した者の魯人を慕うのを望むだけである、右様の手厚い取扱いだが、一切謝金を要せず、全く施しである」。

ロシア病院初代医師アルブレヒトから医学を学んだ日本人として、深瀬洋春、永井玄栄、下山仙庵らがいる。

PP〔14〕 「ロシヤノイロハ」

ロシア語教育

ロシア領事館と一緒に子供たちのための学校が建てられ、ロシア語教育が行われた。初代管轄司祭ワシリイ・マホフに同行して函館に来たイワン・マホフは、1861年「ロシヤノイロハ」という子供用のロシア語入門書を400部作り、子供たちに配布した。

1972(昭和47)年、函館市制50周年を記念して、300人の市民が参加した「函館市民の船」

が日ソ親善を目的として、訪ソした際、両国親善のしるしとして、この「ロシヤノイロハ」(函館市中央図書館蔵)の復刻版が寄贈された。

PP[15] ロシア語教育者としての聖ニコライ

また、聖ニコライも着任すると、学校を任せられ、「露日会話集」を作成し、「ロシア文法」を日本語に訳し「露日辞書」を編纂するなど、ロシア語の教育に務めた。

時代が下って大正・昭和期に北洋漁業の繁栄の中で活躍したロシア語通訳者には、函館正教会の信徒が多かった。

PP[16] 裁縫女学校(後の正教女学校)の生徒たち

学校教育

正教会の境内には正教学校と正教女学校が建てられ、正教の教理の他に、読み書き、裁縫などを教えた。最盛期には 300 人ほどの子供たちが学んでいた。

PP[17]、[18]、[19] 西洋音楽

西洋音楽

正教会の祈祷に欠かすことができないのが聖歌。日本ではまだドレミファソラシドというオクターブの音楽が教えられていなかった頃、正教会では既に四部パートからなる混声合唱による聖歌が歌われていた。その最初の試みが行われたのが函館正教会であった。後、ニコライ堂の祈祷に、聖歌(西洋音楽)を聴くために東京音学校の学生たちが通った時期もあった。

日本語に訳された祈祷文に合うように作曲も行った詠隊教師(聖歌隊の指導者)ヤコフ・チハイ。

♪「聖シメオンの祝文」(CD「正教聖歌Ⅱ」(函館ハリストス正教会聖歌隊)所収)

PP[20]、[21] 復活祭(イースター)

正教(キリスト教)の祭日

復活祭(イースター)は、正教会の一年間の暦の中で最大の祝日。日本で最初の正教会の復活祭祈祷は 1871(明治 4)年、函館正教会において行われた。この時、初めてイースターエッグを見た日本人は、これを「珍奇」と思ったという。イースターエッグを染め、クリーチ(小麦粉、バター、卵を使う)とパスハ(カッテージチーズを使う)というお菓子を作って祭日を祝うロシアの風習が、函館に伝わった。

また、1859 年のゴシュケヴィチの記録には、奉行所の役人や子供たちを「ヨルカ祭り」に招待したことが記されている。

測候

1859(安政6)～1863(文久3)、函館港でロシア病院医師アルブレヒトによって気象観測が行われていた。

写真技術

函館に写真技術をもたらしたのは、初代ロシア領事ゴシュケヴィチ。ゴシュケヴィチに写真技術を学んだ木津幸吉は、函館で北海道最初の営業写真師となる。

また、田本研造は、ロシア病院医師ゼレンスキイ(アルブレヒトの後任)より写真技術を学んだと言われている。

洋裁

ゴシュケヴィチから写真技術を学んだ木津幸吉は、最初、ロシア領事館の洋服の仕立てを行っていた。正教会の信徒の中には、西洋シャツの仕立てを職業とする者もいた。

印刷技術

函館正教会では、1871(明治4)年10月に石版印刷を始めた記録がある。聖ニコライがロシアから携えてきたもので、祈祷書や神学書を印刷した。この頃、本州においても石版印刷を行っていた例は少ない。

PP〔22〕、〔23〕 ロシアン・クロス(八^{はったん}端十字架)

PP〔24〕 イコン(聖像)

【二代目(現在)の聖堂】

PP〔25〕 1907(明治40)年の大火

PP〔26〕 二代目聖堂の建設

PP〔27〕、〔28〕 現在の聖堂(外観と内観)

1916(大正5)年竣工。

1983(昭和58)年 国の重要文化財に指定

【ガンガン寺の鐘】

PP〔29〕

現在の鐘は5代目。大鐘1個、小中鐘5個。
鐘打者が祈祷の中の必要な場所で、決められた打ち方を行う。
1996(平成8)年 環境庁により「日本の音風景100選」に選ばれる。

♪音程の違う複数の鐘が同時に打ち鳴らされるので「ガンガン寺」と呼ばれるようになった。

受け継いだもの

民族や国を超えた祈りの心

・ロシアの聖人サロフの聖セラフィムの言葉より

「まず、自分の心の中に平安を得なさい。そうすればあなたの周りの数千もの人が救われるでしょう」。(正教会の宣教の在り方を言い表している言葉と言える)。

・聖ニコライの言葉より

「私は、日本の中に小さなロシアを作ろうとしているのではない。日本人が自分の信仰として正教の教えを理解して受け継いでいけるまでに独り立ちして欲しいと願っている」。(聖ニコライの宣教の姿勢)。

・東山魁夷の言葉より

「伝統とは、受け継ぐものではなく、消化するものである」。(正教という伝統についても同じことが言える。正教の伝統を受け継ぐことは、リレーのバトンを渡すように“受け継ぐ”ことではなく、一人ひとりが正教の教えを消化し、腑に落として、自分の生き方として、初めて真の意味において受け継いだと言える)。

未来

世界と地域の平安を祈る場所としての函館ハリストス正教会という立場は、昔も今も世々に変わることは無い。

目に見えないものの大切さを理解する心、聖なるものを感じる心の教育が今までになく必要な時代になってきているような気がする。豊かな精神性、優しい心、温かい人間関係が形成される町づくり —— 「町づくり」には“箱物”だけではない、目に見えない部分があることも忘れてはならない。目に見えるもの(形)は、目に見えないもの(心)から出てくるのであるから。

— 以上 —